

金沢学院大学

平成27年度 経営情報学部 入学試験問題（推薦）

経営ビジネス学科 経営システム学科

## 小論文

（注意事項）

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- 2 解答は、解答用紙（原稿用紙）に書きなさい。
- 3 解答用紙には、原稿用紙以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入しなさい。
  - ① 志望学科欄  
志望する学科を記入しなさい。
  - ② 氏名欄  
氏名、フリガナを記入しなさい。
  - ③ 受験番号欄  
受験番号（算用数字）を記入しなさい。
- 4 問題用紙にも受験番号を記入しなさい。
- 5 問題用紙、解答用紙（原稿用紙）は持ち帰ってはいけません。

受験番号	
------	--

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

誰もがこういう面倒な場面をたくさん経験すべきだとは言いません。私だつてできれば面倒はご免被りたい。でも、生きていればいやでも襲つてくるでしょう。インベーダーゲームの敵のように(古すぎるか)。幼い頃や新人時代は、親や周りの人間に助けてもらいながら対処できるでしょうけれど、そのうち必ず、一人で向き合わなければならぬ日が訪れる。そのときの対処方法はどうやって見出すか。それは、経験が強みとなるにちがいない。経験を繰り返すうちに乗り越え方を学び、最悪の事態を回避できるようになる。そして、「あんな経験をしてもなんとかなっているんだから、たいがいのことはなんとかなるだろう」という、「最悪経験」を尺度にした樂觀予測をつけられるようになります。それがささやかな自信となり、落ち着きを身につけて、はたして慌てず騒がずつねに冷静なカッコいい大人に成長していくのではないのでしょうか。ぜんぜんなつてないけれどね、私は。

「戦争の頃を思えば、どうということはない」  
「俺が君の年頃には、ろくに食うもんがなかったからねえ」

私の親の世代の戦争体験者はことあるごとにそう言つて、戦後生まれの我々若者の贅沢や能天気な眉をひそめました。そんなことを言われても、平和な時代に生まれちゃったんだもん、しょうがないじゃないかと、心の中では言い返していましたが、しかし指摘されていることは真実です。そんな地獄の時代を生き抜いてきた父母や祖父母には敵わないとも思います。常にあの時代と比べ、死と隣り合わせにいた時代よりはるかにましだと思える強さがある。そしてもう二度と、あんな悲しい経験を子孫にはさせたくないと守つてくれた暁に、平和は維持されて、著しい経済成長を成し遂げました。

もはや「贅沢は敵だ」も「もつたいたい」も「我に七難八苦を与えたまえ」も死語に近く、誰も本気で口走ることはありません。私は元来、ケチだから「もつたいたい」はしょっちゅう言いますし、現に冷蔵庫の中は賞味期限の切れたものだらけ。自分の舌で「こりや、腐ってる」と判断すればいいと信じているので、ときどきお腹を壊したりもしますが、まあ、問題ない。賞味期限を気にし過ぎてボンボン捨てるほうが罪の意識にかられます。「贅沢は敵だ」は親の教育のおかげか、かろうじて身に染み込んでいますけれど、ときどき「贅沢はステキだ」と思うこともある。でも決して「我に七難八苦を与えたまえ」なんて、戦国時代の武将じゃあるまいし、そんなことを月に向かってお祈りすることはありません。私にとつて辛いときの慰めの言葉といえば、「明けない夜はない」です。

でもきつと、昔の人だつて本気で「七難八苦をもつともつと！」と望んでいたわけではないと思うのです。望んでいなくても襲つてくるからこそ、その艱難辛苦<sup>くわんなんしんく</sup>をどう乗り越えようかと考えた末、「辛い経験をしたほうが人間は強くなる！」というモチベーションを見出したのではないのでしょうか。実際、辛い経験をした人は確実に強くなりますからね。でも本心としては、避けられることなら避けたいと思うのが人の常。人生、便利なほうがいいし、楽になびきたいし、面倒はいやだ。その人々の願いが文明や科学の発達とともに実現し、今や、そんなややこしいことを経験しなくてすむためのあらゆるツールが生まれている状況です。知らない人に電話をかけなくてもメールで用件を伝達できるし、苦手なディスカッションも人前に出ないで自分の部屋でできるし、愛の告白すら、わざわざ電話して、電車に乗つて、相手呼び出して、照れくさい台詞を言つて、「ごめんなさい」と相手に拒否されて、深く傷つくこともなく済ませられる手立てがある。おかげでかぎりなく面倒を避けられるようになりました。でも大人になり、社会に出れば、まだ相変わらず旧態依然の「面倒な人間関係」が待ち受けているのです。生まれて初めて面と向かつて怒られる。あるいは否定される、拒否される。たちまち、どうしていいかわからなくなつて、落ち込み度合いが予想以上に大きくなる。そういうマイナスの経験は、できれば若いうちから積み重ねて、慣れていったほうがのちのち楽になると思うのです。

「携帯世代は面と向かつて『今日、飲みに行かない?』と友人を誘えないんです。断られるのが怖いから。『今日はダメ』と言われただけで、自分を拒絶されたと感じてしまうらしい。断られるのも断るのも嫌なんです」  
銀行に勤める管理職の女性の言葉です。

新聞社に勤める女性は、部下に取材の手配をするよう指示を出し、しばらくのちに訊ねたそうです。  
「どう? 取材、申し込んだ? まだ返事はないの?」

すると、言いつけられた部下曰く、  
「メールしたんですけどね」

メールの返事が戻つてこないなら、電話をかけてみようという発想はなかなか出てこないらしい。

『「かけなさいー!」と言えば電話するんですけど、できれば電話をしないで済ませたいと思う気持ちが強いみたいなんですよ!」  
面と向かう。そんなに嫌なのか。

### 「機械取り」はおもてなしの心

メールの利点はたしかにあると思います。第一に、相手の時間を奪わずにすむ。夜遅くに電話するのは失礼だ、あるいは相手が忙しそうなので、今、電話すると邪魔になるのではないかと危惧される、なんてとき、とりあえずメールで用件を伝えておけば、相手は都合のいい時間にそれを読み、返信することができます。しかも郵送する手紙より迅速にやりとりを行える。その利便性は決して否定できません。現に私も便利に使っています。が、メールだけを信じられない気持ちもあります。迅速ゆえに、なかなか返信がないと却つて不安が募ります。はたしてちゃんと届いたかしら。読んだのかしら。もしかしてメールの見られない外国にでも行っているのかしら。早晩いたたまれなくなつて、結局、声を聞いたほうが話は早いと思つて電話してしまうのです。あるいはややこしいメッセージを伝えなければならぬときも、私は断然、メールより電話を使つてしまう。お詫びやお願ひごなどは、メールで書くとは微妙な言葉が誤解を生む危険性がありますし、だいたいそういう繊細な言い回しを延々打つのが面倒くさいという物理的理由もあります。さらに、その手の用件は、電話で相手の声を聞きながら、もしくは会つて相手の様子を見ながら伝えたほうが、本当はうまくいくことが多いと思うのです。

これは『聞く力』にも書いたことですが、日本語の成り立ちから言つて、日本人は意思を伝えるとき、欧米人のように確固たる自分の主張を持つて喋るのではなく、目の前の相手の顔を窺いながら言葉を選ぶ傾向があります。

「いやあ、巨人が勝つと気持がスカッと……」

あたりまで言いかけたとき、相手の顔がにわかにはころんだら、  
「しますよねえ」

と締めればいいけれど、もし相手の口元がへの字になったら、すかさず、

「しないですよねえ」

と、直前修正できる。お、この人はアンチ巨人だとすばやく察知して出方を調整すれば、相手の機嫌を損ねずにすみませう。つまり、日本語（以外にも韓国語など）の文法は、文章の最後尾で肯定か否定を決定するように作られています。いっぽう、たとえば英語の場合は、主語の直後に肯定否定を決めなければなりません。自分の意思は先に決定しておいて、それから目的語を示す順番です。でも日本語の場合は、話の流れや空気をしながら最後に意思を固めればいい。自分でもんがないのかというご意見もありませう。でも私はこういう「ご機嫌取り」喋りを必ずしも悪いこととは思っていません。むしろ自分より相手の心情や立場を慮る、優れた「おもてなし」の心に思われます。

その点からしても、メールでこういう微妙な調整は難しい。

「先日、あなたは会議で私の意見に反論なさいましたが、どこがいけないのですか。教えてください。あるとき伺おうと思って伺いそびれたので、よろしく願います」

たとえばそんなメールが届いたら、どうでしょう？ 切り口上で、少々感情的な印象を受ける。もしかして「喧嘩売ってるのか？」と思いませんか。ところがこれを面と向かって言われたとします。

「あの、先日、会議のときに私の意見に反論なさいましたけど、どこがいけなかったのでしょうか。あるとき伺えばよかったです。時間がなくて伺いそびれちゃって……。教えてくださいたりなんか、できるかなーなんて？」

趣旨はメールとほとんど変わりがないけれど、やはり本人を目の前になると、少々遠慮がちな言い方になる。あるいは曖昧な言葉を加えるなど、無意識に相手の気持や機嫌を計りながら喋ろうとするでしょう。最初から本気で喧嘩しようというなら別ですが、生身の人間を前にすると、日本人は概して言い方に曖昧表現を加えなくなる習性があるように思われます。いわゆるハーフクエスチョンや「とか」「だったりして」「かなーなんて」などの過度な曖昧語尾表現には問題があると思いますけれど、それも日本人の本質に潜む、できれば真っ向から対立したくない、なるべく波風立てたくないという気持の表れにちがいないのです。

これはあくまで私の主観的な見解ですが、メールで用件を伝えたり、意見を述べたりするときは、ニュアンスがずれて受け取られることもあるので、むしろ喋るとき以上に細心の注意を払わないといけない、いつも思います。

だから絵文字というものが付け加えられるのでしょうか。

「明日はどうして来られないの？」

「ただだと、怒っているような印象を与えかねないので、

「明日はどうして来られないの？」（）」

とすると、いかにも残念がっている気持が伝わります。メールの印刷文字だけでは気持の機微まで伝えられないけれど、絵文字でカバーできる。大の大人のメールがなんだかやけに賑々しい子供染みたことになってきているのは、そういう理由なんだと、最近、理解できるようになりました。

（阿川佐和子著『叱られる力』（文春新書刊）より）

（注1）むじなむじな 艱難辛苦 非常な困難にあって苦しみ悩むこと。

問1 次の語句をすべてそのまま使用し、本文の内容を一八〇字以上二〇〇字以内に要約しなさい。なお、同じ語句を重複して使ってもよい。

①最悪経験

②メール

③曖昧表現

問2 本文の内容を踏まえた上で、あなたはメールというツールをどのように使っていきたいかを、一八〇字以上二〇〇字以内で説明しなさい。

